

日本福祉心理士会 ニュースレター (No. 11)



2022年10月発行 内容:会長挨拶、会員の活躍の様子、
ニュースレター担当者から一言、研修会のご案内

会長挨拶 ー社会に貢献する福祉心理士ー

富樫 ひとみ (茨城キリスト教大学)

日本福祉心理士会会長の富樫ひとみでございます。福祉心理士の皆さまにおかれましては、日々、福祉支援や心理支援などをご実践されておられますこと、敬意を表します。

2022年は、わが国の社会福祉制度の転換期と言えるかもしれません。それは、省庁の垣根を越えることも家庭庁の創設が決定された年だからです。これまでも社会や教育の場での福祉・心理支援は厚生労働省と文部科学省等の協働が図られてきました。しかし、この度新設されることも家庭庁は内閣総理大臣の指令の下、政府の強力な権限による対応が期待されています。

この、省庁の垣根を越えた対応についての社会からの要請は、取りも直さず子どもに関する社会的課題全般を総合的に支援することの緊要さを物語っています。また、子ども家庭庁に期待されている垣根を越えた協働は、新たな省庁の創設に至らないまで

も高齢者や障がい者、低所得者等の社会的課題への対応に際して、一層求められるようになるように思います。

このような社会情勢の中、様々な社会的課題に対応するためには、社会的・福祉的見地と心理的見地の双方から課題を捉え、支援する専門性が欠かせません。福祉心理士は、社会・福祉的知識やスキルと心理的知識やスキルを兼ね備えている専門家なので、福祉心理士の重要性は増し、社会からますます求められる存在であると確信しています。

これからも広く社会からの要請に応えるべく、研修会の開催など福祉心理士一人ひとりが、またお互いがともに研鑽を重ねられるよう、一層の基盤整備に努めてまいります。

引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

会員の活躍の様子

○小林 真起子さん

横浜で障がい児者福祉に携わって 20 年以上が過ぎました。現在は、放課後等デイサービスや保育所等訪問支援などを実施する「よろこび」という事業所を運営しています。

当事業所には、重症心身障がいの子どもから障がい者手帳のない発達障がいの子どもまで、様々な子どもたちが通ってきています。中には、複雑な環境下で心が傷ついたり、学校や他の場所へ行きづらかったりする子どももいます。

福祉心理士として私が心がけていることは、一人ひとりが特別な存在である子どもたちをありのままに受け止め、受容と共感を持って寄り添い、その子どもの世界に受け入れてもらうことです。私たち大人の世界に引っ張り込もうとするのではなく、子どもたちの世界に入れてもらえて初めて信頼関係の構築がなされると感じています。

子どもの思いを受け取るために、言葉だけに頼らずに子どもの表情や行動、ちょっとした変化を丁寧に観察し、スタッフ同士で常に話し合いを行っています。

保護者に対しては、その保護者の大変さや不安、辛さなどを受け止め、必要に応じて福祉的知識を持って選択肢を伝えたり、子どもの変化を保護者に伝えて様々な面を持つ子どもの様子を知ってもらえるように話をしたりしています。また、子どもたちへの関わり方や関係機関との連携の回り方について伝えることや、実際に学校などの本人が所属している場所へ訪問してより良い支援に繋げるような活動も行っています。

活動をする中での私の信念は、「その人がその人らしく笑顔で生活できるようにお手伝いをする事」です。一人ひとりの笑顔のために、何が出来るか。その人らしい生活とはどのようなものか。これからも、常にそのことを考えながら一人ひとりに寄り添っていきたくと考えています。

○原田 渚 さん

私は、児童心理治療施設という施設で児童指導員として働いています。施設には、心理的問題を抱えて日常生活に支障をきたしている子どもが入所しています。具体的には、虐待を受けてきた、発達の特性を持っている、自分を傷つけてしまう、暴力などの不適切な行動をしてしまうなどといった子どもがいます。決して子どもだけが悪いわけではありませんが、“今を変えるために”子ども自身も動機を持った上で、目標に向けてそれぞれの課題に取り組みます。「治療」というと何かを治すということを想像しますが、持っている苦しさ・生きづらさを抱えつつどのように生きていくか、ということのを他職種で連携しつつ支援していきます。例えば、苦しくなると自傷してしまう子には、自傷はしてはいけないと言うのではなく、対処の選択肢の幅を広げることができます。気持ちを言葉で表現する、不安なことから身を守る行動を取る、傷つける以外の方法で紛らわせる、医師が処方した薬に頼ってみる、などがあげられます。自傷を完全に手放せなくても大人を頼りながら、施設を出てからもできることを一緒に見つけて

いくことが治療の一つではないかと考えています。

子どもと日常生活を通して関わって行く上で、対応に悩むことがあります。そのような時には、子どもたちが「安心して、落ち着いて過ごせるか」を基準にして考えます。虐待を受けて育つと、大人からの侵入を受けてきたため、自分と他者との境界が分からなくなります。例えば他児・職員との距離が近くなりすぎる、家と学校、自分の物と人の物の区別がつきづらいなどです。自分の時間・場所・物の境界を作ること、子どもと子

どもの境界に大人になることで、他児からも侵入されず、安心した感覚を身につけることを目的にしています。

他にも、「社会に出たときにどのように生きていくか」ということも常に念頭に置いています。不適切な行動で要求を通そうとすることは、大人になれば許されません。子どもが可哀想だからと、良かれと思ってしたことが、子どもを苦しめることもあります。子どもに何かをするときは、「してあげる」のではなく、根拠・治療目的を持って対応することを心がけています。

ニュースレター担当者より一言

○寺田 翼（社会福祉法人 原町成年寮）

近年コロナ情勢で研修等もオンライン化が進み、気軽にネットで参加できるようになってきているかと思います。

その中で福祉心理士会の研修では、多種多様な会員の皆様からお話を伺え、各分野の専門性や知識を学ぶことが出来て私自身も毎回見分が広がるように感じます。特に現場での実践に関して、それぞれの分野からのお話を伺える機会というのは貴重なことであると思っています。このニュースレターを通して、皆様が繋がり、今後の福祉心理士会や研修・大会発表が活発化していくきっかけとなれば嬉しい限りです。

○塩澤 綾子（社会福祉法人 浴風園）

社会福祉法人浴風会の塩澤と申します。高齢者施設でケアワーカーとして日々の業務を行う中で、心理的支援の重要性と、実際の支援に取り入れる難しさについて常に感じております。多種多様な会員の皆様がいらっしゃる福祉心理士会での活動を通して、福祉心理に関する知識を深め、より一人一人に寄り添った支援が行えるようにしていきたいと考えています。

○後藤 幸洋（北海道置戸高等学校）

北海道置戸高等学校の後藤と申します。今年度よりニュースレターの作成に関わらせていただいております。近年、高等学校においても心理的支援の重要性が高まってきています。福祉心理士会の活動を通して、心理に関する知見を深め、教育活動に還元していきたいと思っています。

研修会のご案内

□令和4年度 日本福祉心理士会研修会について

福祉心理士会研修担当 大西 良

日本福祉心理士会では、今年度については2回研修会を計画しています。次のとおり、実施する予定ですので、ご参加くださいますようお願い申し上げます。なお、いずれもオンライン（Zoom）での開催となりますことを申し添えます。

- 第1回 研修会 日 時 令和4年11月6日（日） 10時30分から
テーマ「社会で活躍する福祉心理士の実践活動
～子ども・若者支援の現場から～」

内 容・講演

演題「夜回りによる若者女性の相談援助活動について」

講師：筑紫女学園大学 大西 良

• 実践活動

発表者 福岡市立児童心理治療施設

生活相談員 原田 渚 立川 明日香



- 第2回 研修会 日 時 令和4年12月24日（土） ※日本福祉心理学会と同日
テーマ（仮）「子どもの命を守る福祉心理士の悩み」
内 容 子どもの虐待など子どもの命を守る福祉心理士の実践と
そのあり方についてグループディスカッションを行う。



【編集後記】

今年度ニューズレターを担当することになり、何もわからないまま作成を始めました。様々な方々にご支援いただきどうにか完成させることができました。支援いただいた皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。一昨年度のニューズレターは休刊だったとのこと。昨年度、再開されたこのニューズレターを今後も発展させていきたいと考えています。 (後藤 幸洋)